

関西電話100年記念

人間国

芸能の部

能楽

能シテ方／松本恵雄

文楽

狂言／十二世茂山千五郎

人形浄瑠璃文楽太夫／四世竹本越路大夫

人形浄瑠璃文楽太夫／七世竹本住大夫

人形浄瑠璃文楽三味線／五世鶴澤燕三

人形浄瑠璃文楽人形／吉田玉男

歌舞伎

歌舞伎立役／十三世片岡仁左衛門

音楽

地唄／菊原初子

舞踊

京舞／四世井上八千代

上方舞／吉村雄輝

重要無形文化財の指定並びに保持者及び保持団体の認定の基準(抜粋)

(昭和二十九年二月五日 文化財保護委員会告示第五五号)

(昭和五〇年一月二〇日 文部省告示第一五四号改正)

第一 重要無形文化財の指定基準

一 芸能関係

(一) 音楽、舞踊、演劇その他の芸能のうち次の各号の一に該当するもの

(二) 芸術上特に価値の高いもの

(三) 芸能史上特に重要な地位を占めるもの

(四) 芸術上価値が高く、又は芸能史上重要な地位を占め、かつ、地方的又は流派的特色が顕著なもの

(五) 前項の芸能の成立、構成上重要な要素をなす技法で特に優秀なもの

第二 重要無形文化財の保持者の認定基準

一 芸能関係

(一) 重要無形文化財に指定される芸能又は芸能の技法(以下単に「芸能又は技法」という。)を高度に体现する者

(二) 芸能又は技法を正しく体得し、かつ、これに精通している者

(三) 二人以上の者が一体となって芸能又は技法を高度に体现している場合において、これらの者が構成している団体の構成員

解説 重要無形文化財 芸能の部

能 楽

能シテ方

能^ヌ立^{タテ}方^{カタ}の一つ。詩的・歌舞的・曲線的な技法によって主役をつとめることが多く、現行演目でシテ方がまったく登場しないものはありません。シテの語源は「仕手・為手」で、演技する人・役者一般をさす言葉から、主役の意味に変化しました。シテ方には観世・宝生・金春・金剛・喜多の五流があります。シテ方が扮する最も重要な役をシテ、他のシテをすべてシテツレ（またはツレと呼びます。また前後二場からなる能では、前シテ・後シテと区別されます。少年が扮する役を子方といい、これも特別な場合を除いてシテ方から出ます。シテはさらに演出家・興行主としての役割をもち、演能の際には配役の決定や、ワキ・狂言・囃子の各方への出演依頼も行っています。

狂言

狂言は猿楽の滑稽な演技がしだいに洗練されていったものと考えられています。不明な点も多く、南北朝時代に能と提携して今日に至っているため、明治期以降は能と狂言とを合せて能楽ともいいます。江戸時代の能・狂言は武家の制楽となり、狂言方は能シテ方に服属する一方で、武士に準じた待遇を受けました。このため狂言は能とともにしだいに古典芸能としての体系を整え、この時期に大藏流・鶯流が確立。ついで京都禁裏御用をつとめ、同時に尾張藩・加賀藩のお抱えでもあった和泉流が勢力を伸ばしました。明治維新により武家が没落すると、狂言は衰退しましたが、大藏流は東京の山本東次郎家、関西の茂山千五郎家・茂山忠三郎家などの有力弟子筋が芸風を維持し、和泉流も京都から七世三宅庄市、金沢から五世野村万蔵らが上京して東京の和泉流を発展させました。現在上演可能な作品は大藏流が約二〇〇番、和泉流が約二五〇番で台本には多少の相違があり、またわずかながら流派独自の作品もあります。最近の演能会では能の番数にかかわらず、狂言は一番しか行われないのが普通になりつつあり、能舞台とは別に狂言のみを上演する会が増えてきています。

文 楽

人形浄瑠璃文楽 太夫

太夫は古代から舞楽や神事を司る人をさす言葉でしたが、のちに男性芸能者の尊称として広く使われるようになりました。近世邦楽では一般的に人形浄瑠璃・義太夫節の語り手を太夫といいます。大阪庶民に支持されて発展した義太夫節は、大阪弁を基本に登場人物の性格を言葉で明瞭に説明する工夫が凝らされているのが大きな特徴。言葉は無旋律で語る（詞）（主としてせりふ）、旋律に乗って語る（地）（主に説明部分）、その中間的な要素をもつ（色）に分かれます。また長時間の語りが必要とされるため、太夫は喉と腹筋力の強化につとめ、さらに上演の際は素肌に腹帯を巻いて下腹部を固定し、懷中に小豆や砂を入れた袋をしのばせてバランスを保ち、深く腰掛けてから、息をいっばいに吸いこんで語るため、時として「命がけの芸」ともいわれます。太夫の姓には初世竹本義太夫を祖とする竹本と、豊竹若太夫の流れをくむ豊竹があります。

人形浄瑠璃文楽 三味線

義太夫節は原則的に太夫と三味線各一人で演奏されますが、曲によってはツレ弾きや箏・胡弓・八雲琴などが加わり、ほかに薩で大阪風の下座囃子を使用することもあります。また道行や景事など音楽的要素が特に強い場面は大勢の掛け合いで演奏されます。三味線は棒も胴もすべて大ぶりの太棒。皮や撥も厚いものを使用するため、太夫の太く大きい声とよく調和し、その場の気分、登場人物の性格、喜怒哀楽などを表現する重要な存在となっています。また太夫を指導・育成する役割も担担し、芸や経験で上まわる三味線方が太夫につくのが理想とされています。いくつかの芸系があり、竹澤、鶴澤、野澤、豊澤姓が現存しています。

音楽

地 唄

室町末期、盲人の芸として伝承された三味線音楽が地唄で、江戸に對して上方を「地」と呼んだのでこの名があります。また、舞の「地」(伴奏)が語源という説もあり、別に「法師歌」「上方歌」「哀歌」という呼び名もあります。室町末期に石村検校をはじめとする盲人音楽家が、小編の歌謡を組み合せて一曲とする「三味線組歌」を作って専門芸にしたのが始まり。この時代の組歌は「本手組」、その後新たな曲風で作られた組歌を「破手組」といいます。組歌は曲風や三味線伴奏が類型的なため、江戸中期以降新作が途絶えましたが、地唄の基本曲種として今も尊重され、京都の柳川流、大阪の野川流によって伝承されています。野川流は後に中国・九州地方に広まり、明治以降は東京にも普及しました。地歌から派生した種目としては長歌・芝居歌・端歌・謡曲物・浄瑠璃物・作物・手事物・京流手事物などがあり、いずれも中棹三味線で演奏されています。

舞 踊

京 舞

上方舞の中でも京都固有の特色をもつ井上流を、特に「京舞」と呼ぶことがあります。井上流は、寛政年間(一七八九—一八〇一年)に近衛家の舞指南役をつとめた井上サト(初世井上八千代)が宮廷文化を基盤に創始した流派。二世・三世八千代の時代に金剛流・観世流の能、歌舞伎や人形浄瑠璃などが取り入れられ、独自の型として人形振りを作り上げています。以来は二世紀の歴史をもつ流派で、線の太い、明快で力強いなかに優艶な気品をたたえた芸風の特徴があります。

上 方 舞

上方舞は女性の寂しさや恋の哀しみなどを表現する内省的な室内舞踊として、京・大阪の遊里を中心に発達しました。その技法はきわめて繊細で、抑制のきいた簡潔な描写が特徴。上方舞の源流は公家に伝えられた御殿舞や能の舞といわれていますが、人形振りや歌舞伎舞踊の技法も取り入れてきたため、厳しい風格と艶のある雰囲気が入りまじった独特の個性をもっています。演目は「艶物」といわれる「雪」「闇の扇」などの女舞を中心に、「能採り物」と呼ばれる「珠取海士」「葵上」「作物」と呼ばれる「蛙」「鼠の道行」など数十曲が伝承。主な流派に京都・祇園を本拠地とする井上流、明治・大正期の大阪芸界を風靡した二世榎茂都扇性の流れをくむ榎茂都流、上方歌舞伎の振付師・山村友五郎を流祖として女舞の技法を確立した山村流、京都から大阪に移って地位を築いた吉村流があります。また東京には山村流から派生した武原流・神崎流があり、幕末に隆盛を誇った篠塚流・小川流などの名跡も残っています。

人形浄瑠璃文楽 人 形

人形遣いの手法には直接手で扱う「手遣い」、糸で吊す「糸操り」、体内に仕掛けを組み込んだ「へからくり」がありますが、日本の人形芝居は大部分が手遣いで行われています。人形は傀儡(くぐつ、かいらい)、人形遣いは傀儡師と呼ばれ、大道芸として人気を得ました。一六世紀末、三味線を伴奏に集団で人形を遣う形式が生まれ、元禄時代の初めに京都五条大橋の東に芝居小屋が設けられて人形浄瑠璃が誕生。その後竹本座を継いだ吉田文三郎の工夫によって人形の三人遣いが編み出され完成しました。吉田家は浄瑠璃人形遣いの一大系で、文三郎の父・三郎兵衛に始まり、その技法を今に伝えており、桐竹姓も弟子筋にあたります。文楽人形の「頭」は、鯨の髭(鬚)を薄く削った「バネ」へからくりによって、うなずき(前後)、目(左右・開閉)、口(開閉)などの動きができるようになっています。また男女・老若・強弱などでおおまかに分類され、それぞれの型は髪形・塗り色・衣装などで飾ることによって、さまざまな役に使用されます。現在の文楽で比較的良好に遣われる頭は約四〇種類といわれます。

歌舞伎

歌舞伎立役

立役は本来、地方(音楽演奏者)に対して立方(演技者)の意味でしたが、歌舞伎禁制後は女と子供の役を分離して、男役をさす言葉になりました。その後さらに役柄が分化すると、若衆方・敵役・道化方・親仁方を切り離し、荒事師(荒事の主人公)・和事師(色事を演じる美男役)・実事師(現実的な芝居の主人公)をさすようになりました。現在は男性の役を立役というのが普通ですが、役どころは総じて善人で、しかも思慮深い立派な男。歌舞伎界を背負って立つ俳優が演じることが多いのです。また「砥粉」あるいは「薄肉」という自然な化粧、「生繻」という髪を使うのが一般的。代表的な役柄に「坂名手本忠臣蔵」の大星由良助、「菅原伝授手習鑑」の源蔵、「一谷嫩軍記」(熊谷陣屋)の熊谷直実などがあります。

工芸技術の部

陶芸

色絵磁器／十三代今泉今右衛門

鉄釉陶器／清水卯一

備前焼／山本陶秀

染織

友禪／森口華弘

友禪／羽田登喜男

江戸小紋／小宮康孝

伊勢型紙 縞彫／故児玉 博

伊勢型紙 糸入れ／城ノ口みゑ

漆芸

蒔絵／大場松魚

蒔絵／寺井直次

蒔絵／磯井正美

金工

茶の湯釜／角谷一圭

彫金／金森映井智

日本刀／月山貞一

日本刀／隅谷正峯

木竹工

木工芸／大野昭和齋

人形

衣裳人形／野口園生

撥鏝

撥鏝／吉田文之

重要無形文化財の指定並びに保持者及び保持団体の認定の基準(抜粋)

(昭和二十九年二月五日 文化財保護委員会告示第五五号)

(昭和五〇年一月二〇日 文部省告示第一五四号改正)

第一 重要無形文化財の指定基準

一 工芸技術関係

陶芸 漆芸 金工その他の工芸技術のうち次の各号の一に該当するもの

(一) 芸術上特に価値の高いもの

(二) 工芸史上特に重要な地位を占めるもの

(三) 芸術上価値が高く、又は工芸史上重要な地位を占め、かつ、地方的特色が顕著なもの

第二 重要無形文化財の保持者の認定基準

一 工芸技術関係

一 重要無形文化財に指定される工芸技術(以下単に「工芸技術」という。)を高度に体得している者

二 工芸技術を正しく体得し、かつ、これに精通している者

三 二人以上の者が共通の特色を有する工芸技術を高度に体得している場合において、これらの者が

構成している団体の構成員

解説 重要無形文化財 工芸技術の部

陶芸

色絵磁器

釉薬をかけて本焼きした磁器の表面に、赤・黄・緑・紫などの上絵具で文様を描き、さらに上絵窯（錦窯）に入れて七〇〇～八〇〇度で焼付けたもの。色絵だけのものは「錦手」、染付け併用されたものは「染錦」、また金・銀彩を加えたものは「金襴手」と呼ばれています。明代の中国に発達した色絵磁器は、江西省の景德鎮が主産地として知られ、珍重。日本では有田・九谷・京都で発達しました。

鉄釉陶器

釉薬中に含まれている鉄分（酸化鉄）によって、黒色・黒褐色・茶色・柿色などに呈色する陶器のこと。一般には「天目」とも呼ばれています。天目は東洋独特の焼きものとして古来から中国各地で製造され、特に宋時代の天目が有名ですが、日本では鎌倉から室町時代に瀬戸で焼かれて以来各地で大きな発展をとげ、今では中国天目の名品に劣らないものが数多く作られています。

備前焼

岡山県備前市伊部を中心に、この地方特有の鉄分の多い土を主原料としており、釉薬を用いない焼き締めによる焼成方法が特色で、土そのものの味わいと窯変による効果を生かした独特の芸術性を備えた陶芸。大正末期頃には桃山時代の豪放で風雅な趣に富んだ作調を模範として、土自体の味わいや、窯変による効果を意図した芸術的作風が主流となりました。

染織

友禅

手描きによって自由に模様を表現する友禅は、江戸時代中期に刺繍・絞り・摺箔などの技法が完成され、日本の衣裳の華やかさを代表する染織として知られてきました。このため近代の友禅作家は、いかに新鮮な模様・意匠を考案するか、いかに伝統の技法を駆使するかに重点をおいた活動を行っています。友禅は発祥の地である京都と、各種工芸が盛んな金沢と、近代以降は東京でも生み出されるようになり、それぞれの個性を競い合っています。

江戸小紋

小紋染は江戸時代に武家の袴の模様として使われ始め、庶民の女性にも愛好されて流行した日本の代表的な染色技法の一つ。細かな模様を一面に配して単色で染め上げるのが特徴で、明治以後、一般の着物の柄として広く普及しました。その染めの美しさは工芸としても高く評価されています。

伊勢型紙

伊勢型紙は、江戸小紋や浴衣・友禅などを染める型紙を作る技術で、縞彫・突彫・錐彫・道具彫などがあります。江戸時代以来、三重県鈴鹿市白子町一帯で発達。なかでも縞彫は鑿の定規に当てた小刀を手前に引いて彫る引彫技術の一種。引彫の中では最も熟練を要するといわれ、小紋や中形に欠かせない柄である毛万筋・薩摩・養老などを作り出します。

伊勢型紙糸入れ

糸入れは縞彫・突彫などで彫刻された型紙の模様を固定するために細かい絹糸を支えとして張り渡す技術のこと。作業は二枚にはがした型紙の一枚に糸を張り、もう一枚を柿渋で正確に重ね貼りして、もとに戻すという手順で行われます。現在では薄い紗を漆で貼り合せる方法が一般的になっていますが、精緻な縞彫には糸入れが依然として不可欠な技法とされています。

漆芸

蒔絵

漆でかいた文様の上に金銀粉や色粉を蒔きつける蒔絵は、日本の漆芸加飾を代表する芸術的価値の高い技法の一つ。奈良時代に始まり、平安時代に純和風を発揮、さらに鎌倉時代に技術的進歩を遂げ、室町時代には幸阿弥、五十嵐の蒔絵師が出ました。江戸時代には、両家のほか古満派、堀川派、琳派などが出てその技を競い合い、明治時代には柴田是真、白山松哉、川之辺一朝などが作家として活躍しました。蒔絵は、研出蒔絵、平蒔絵、高蒔絵など、数多くの技法があり、その他に平文（平脱）、螺鈿など色彩や光沢に変化のある素材を併用して表現する豊かな応用技法もあります。

木工芸

蒔 罫

蒔罫は線刻による漆芸の加飾技法の一つ。特殊な彫刻刀で彫り込んだ文様部分に朱色などの色漆を充填し、乾燥後炭で研ぎ出して余分の漆を取り除き、同一平面上に現れた塗地と文様を呂色漆で仕上げる技法です。「きんま」の名称は、ヒルマ、タイ、マレー地方の人々が好んで喰む木の葉のキンマに由来。日本には室町時代に渡来、江戸末期に讃岐高松で活躍した玉椿象谷がこの技法を得意としたことから、高松漆器の大きな特色として伝承されています。

木 工 芸

古墳時代、大陸からの工人の渡来などによって、日本の木工芸は木造建築や木造彫刻の分野とともに発展。正倉院宝物には唐木材を中心とした工芸品も多く、平安時代以後は和風化が進み、日本材の特色を自然に表現する技法が発展、中世には茶人達が愛用。江戸時代には小林如泥らのように名を残す人も現れるようになりました。技法は大別して指物（板物）・剣物・挽物・彫物・曲物があり、素材の特色を生かし、しかも狂いを防止するためには、熟達した判断力と入念な作業が必要です。

金 工

茶の湯釜

鋳鉄の釜が初めて制作されたのは奈良時代ですが、鎌倉期から室町期にかけて中国から茶の湯が伝わり、多くの茶釜が作られるようになりました。当時の主な生産地は福岡県の芦屋と栃木県の佐野天命で、その後は関西を中心に芦屋系、関東を中心に天命系の分派が生まれました。芦屋の釜は形が穏和で、繊細な地肌と水墨画風の図柄による文様をもつものが多く、天命の釜は姿形が男性的で、文様がなく荒地地肌が大きな特色となっています。

人 形

衣裳人形

衣裳人形はもと頭や胴の簡単な原型を作り、裂地で仕立てた衣裳をまとうせた素朴な風俗人形でしたが、江戸時代前期に当時の風俗や人気役者の姿をかたどった浮世人形が制作されるようになりました。その後、次第に玩具人形・雛人形から分離し、近代になって一部の学者や愛好家の間で研究が行なわれ、作者の個性をはっきりと表現した、芸術的にも価値の高い作品が創られるようになりました。日本独自の衣裳を着付け、美しい姿態を効果的に表現する衣裳人形は、彫刻的な冷たさに偏ることなく、あくまでも人形らしい親近感と愛らしさをもつ美術品として特異な立場を保ち、創作人形の重要な分野として、すぐれた作家が活躍しています。

彫 金

彫金は各種の鑿・金槌・きさげ・金床を使用して、金工品の表面に彫技・削技で加飾を施すもので、仏教の渡来とともに仏具製作上必須の金工技術として発達しました。室町期には、装剣金工の隆盛とともに大いに工夫が凝らされ、精緻で洗練された細工が重ねられました。明治初期の廃刀令により、造幣、装身具、器物、建築金具等の製作に活路を開くことになり、加納夏雄、海野勝辰らの名工が指導して技法の刷新に寄与。技法には毛彫・鐵彫・線彫・片切彫・透彫・高肉彫・薄肉彫・肉合彫・象嵌・魚々子などがあります。

撥 鏤

撥 鏤

成形した象牙の表面を紅・緑・紺などに染め、撥鏤で文様を白く浮き出させる技法。さらにこの文様に彩色することもあります。象牙細工は先史時代から行われ、エジプトやヨーロッパで発達して唐代の中国に伝わり、中国では鏤牙と呼ばれ、奈良時代に日本に渡来し撥鏤と呼ばれるようになりました。正倉院宝物には多数の撥鏤作品とともに象牙の原料が遺されていることから、当時すでに国産品が作られていたと考えられます。平安時代以降、その技法は絶えましたが、明治時代に正倉院宝物などを調査し、復元や保存修理した吉田立斎が復興し、子息の吉田文之がその技術を継承しています。

日 本 刀

わが国には四世紀頃、直刀があり、その後打刀が出現し、桃山時代には大小拵が正式のものとなりました。美濃・大和・山城・備前・相州には名匠が輩出し、これら各鍛冶は「五か伝」として継承。日本刀の特徴は、鋼を折かえし鍛練すること、固い「皮がね」と軟らかい「心がね」を組合せること、上取りをして焼入れすることなど。研ぎ上げた刀が美しい肌、華やかな刀文を見せるのはこのためです。

重要無形文化財保持者一覽 (平成五年四月一日現在)

芸能の部 (三三件 一〇四人)

能楽

能シテ方

能ヲキ方

能囃子方 笛
能囃子方 小鼓

能囃子方 大鼓

能囃子方 太鼓

狂言

文楽

人形浄瑠璃文楽 太夫

人形浄瑠璃文楽 三味線

人形浄瑠璃文楽 人形

歌舞伎

歌舞伎立役

故喜多 六平太
昭和三年四月二五日認定

故近藤 乾三
昭和四年四月二五日認定

故後藤 得三
昭和五年四月二五日認定

故松岡 道雄
昭和五年四月二五日認定

故豊崎 彌左衛門
昭和五年四月二五日認定

故高橋 進
昭和五年四月二五日認定

故本 恵雄
平成三年四月二五日認定

故松本 謙三
昭和四年四月二五日認定

故宝生 弥一
昭和五年四月二五日認定

故森 茂好
昭和六年四月二五日認定

故田 大五郎
昭和六年四月二五日認定

故幸 祥光
昭和七年四月二五日認定

故幸 宣佳
昭和七年四月二五日認定

故川崎 九瀬
昭和八年四月二五日認定

故亀井 俊雄
昭和八年四月二五日認定

故安福 春雄
昭和九年四月二五日認定

故尾 乃武
昭和九年四月二五日認定

故楠本 豊次
昭和九年四月二五日認定

故三井 春彦
平成四年五月二五日認定

故善竹 彌五郎
昭和四年四月二五日認定

故野村 万蔵
昭和四年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故七世 三宅 庄市
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

音楽

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

歌舞伎立役

故松本 白鶴
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

故三井 山千作
昭和五年四月二五日認定

1993年7月7日発行

発行編集 責任者	萩原幸治		
編著者	岸本千賀子		
デザイン	小林康子	池田昌弘	浜口恵美
写真	尾花佳孝	谷口充宏	米田ひろし
Illustration	萩原幸治	有元良樹	足立克一
編集室	井本悦生	横山道子	
編集スタッフ	山名啓之	木村貴子	

監修 NTT関西支社 広報室
〒540 大阪市中央区馬場町3-15
☎06(948)3254

発行所 NTT長距離通信事業本部
関西ネットワークセンタ 総務部 広報室
〒530 大阪市北区堂島3丁目1-59
NTTテレパーク堂島第1ビル
☎06(454)1046

制作協力 株式会社 クリエイト大阪

写真製版 株式会社 日本美術

印刷 NTTプリコム株式会社

題字 鈴木葩光(書家)

「人間国宝」の「間」の字は、電話機をイメージしたものです。